

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が大事^{だいじ}にしている言葉

一般の部 優秀賞 受賞作品

「形あるものは」

神奈川県
松本 清美

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

当時、母と私は立ち退きの決まった古い家を期限付きで借りて暮らしていた。洋服店の仕立て職人として、文字通り腕一本で母は私を育ててくれていた。

小学生の時だった。何かの拍子で私は家の食器を割ってしまった。

「怒られる！」

とつさに思った。

テレビドラマや漫画などでも

「こらっ！大事にしないからよ。」

と、食器を割った子供が怒られ、説教されるのが常だった。同じようなことが自分の身に起こるに違いない。

覚悟して母の顔を見た。

すると母は何事も無かったように涼しい顔をして

「形あるものは必ず壊れる。」

そう言った。

衝撃だった。

ちつとも怒ってない。怒られない。

さつさと壊れた食器を片付け、まるで何でもなような母の対応に驚き、なにかとてつもないものを見たような気がした。

その後、私はやはり幾度か同じように食器等を割ったり、壊したりした。

その度に母は、

「形あるものは必ず壊れる。」

そう言うてくれた。

自分も大人になったら、怒らないでそう言おうと密かに心に誓った。

遅い結婚と高齢出産をし、私は三人の子の母となった。私と同じように子供も食器を割った。

「あっー！」

私は瞬時に狼狽えた。

そして、母の言葉を思い出した。自分が誓ったことも。

実際に親になってみると、自分が思い描いた理想の母親像には程遠く、こんなに器の小さい人間だったのかと思ひ知らされる子育ての日々だった。

また、私の子育ての最中、幼い頃の私とのエピソードを母が時折話してくれた。

母が家で洋服の仕立てのしつけをしていた時、母が糸でしつける片っ端から、私がそのしるしの糸をせっせと取っていたらしいのだ。「何か静かやなあと思ったら、小さい指でずらっーとしるしを取ってたんよ。よしよし、手伝おうと思っただんやなって。」

場面を思い浮かべたのか、楽しそうにおかしそうに話した。

結果的に仕事の足を引っ張った私のしたことを、お手伝いしたかったと察してくれたか、そう捉えてくれたのだ。

「こらっ。せつかくしたのに。」

なんて、私なら怒っていたのではないかと、母の優しさに恐れ入った。

素直に母の言う事を聞いていたらしい私が、小学生になり反抗しだした時は

「こんなことも言えるようになったんやなあって、実は内心喜んでたんよ。」

と白状してくれた。

私が小学五年生位の時、

「私はお母さんのようにはならないんだ。」

と、生意気なことを言った時も、

「そうそう。」

と頷き、なんだか嬉しそうにさえ見えた。不思議な感じがしたから覚えている。

母に向かって心無い言葉を投げつける私をも受け止めてくれていた。

「形あるものは必ず壊れる」

諸行無常の理を説く衆知の言葉だけれども、母が言ってくれた言葉の中には、

「かまわん、かまわん。」

「大丈夫、大丈夫。」

といったような、私の失敗や未熟さを丸ごと許したい母の姿が隠されているようで、私にとっては母独自の色合いを持つ、母のオリジナルな言葉のように感じるのだ。

私に子供が生まれて母と同居し、トータルで半世紀を共に過ごした。正月を過ぎ、体調を崩して家で約二週間寝込んだだけで、九四歳で昨年旅立ってしまった。

居ることが当たり前だった母を亡くした喪失感は想像以上だった。最近、夫が取り寄せ愛用していたごはん茶碗を私が割ってしまった。幸い夫も怒らずにいてくれた。

「そういえば、私食器を割って母に怒られたことなかったなあ、一度も。形あるものは必ず壊れるって言ってね。」

と振り返り話した。

母は苦しい生活を私に感じさせないくらい大らかで、嘆いたり、愚痴、悪口をほとんど言ったりしなかった。それがどんなに有難かったか、どんなに大変なことだったか、大人になつてよくわかる。

理屈を述べる私と違って、偉そうにもものを論じること無かったから、遠くばかり見て、すぐそばの母が人としての上等なお手本であることにも気づけなかった。

肩を揉んで、髪をといて、母が好きだったことをもつとしてあげたかった。もつと優しくしてあげれば良かった。

母への感謝と共に、後悔や懺悔の気持ちも湧いてくる。

「形あるものは必ず壊れる。」

今またこの言葉を母は私に伝えたいのかもしれない。時を経て私の中で重みを増すこの言葉を、母の思い出と共に噛み締める。